学生活動サポート助成金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

「学生活動サポートプログラム」は、キャリアデザイン学部の理念に基づき、キャリアデザイン学およびキャリアデザインの実践を発展させる活動・研究（キャリアデザイン学部の学生が代表者となる団体が行うものに限る）について、その費用の一部に対して助成を行う制度である。対象となる活動の条件は、以下の通りである（2024年度学生活動サポート助成実施要項より）。

（1）学生主体の活動であること
（2）法政大学キャリアデザイン学部の外部にある個人や団体等と協働・連携し、社会に貢献する社会的活動であること
（3）活動の受益者が活動の当事者（団体）に限定されていないこと
（4）活動の成果を広く社会に公開できるものであること

以下のページでは、2024年度に助成を受けた各団体の実績報告書を掲載しているので、ご参照いただきたい。本プログラムの助成金は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されたものである。同学会の運営にご協力いただいている全ての方々に、この場を借りて改めてお礼申し上げたい。

（学生サポート委員長　安田節之）

神奈川県のインクルーシブ教育実践校におけるキャリア支援
―他者と楽しく関わり合いながら自分に自信を持つワークショップ―

代表者：髙田みのり

1　連携した学外の個人・団体名

神奈川県立　霧が丘高等学校

2　実施概要

(1) 企画実施背景及び概要

本企画は神奈川県立霧が丘高等学校 (以下、霧が丘高校) の卒業生である多久和がインクルーシブ教育に注力している母校で、大学生として何か関わったり、貢献したりすることができないかと考えたことが発端となって始まった。

本企画では、当該高校において、障害のある、あるいはその傾向のある生徒たちのキャリア支援を目的としてワークショップを実施した。霧が丘高校では共生社会実現を目指したインクルーシブ教育の実践を推進しており、私たちは程度の異なる様々な障害を持つ生徒たち一人ひとりにとって有意義な活動にすべく取り組んだ。

本企画の趣旨はキャリア支援の対象者である霧が丘高校の生徒たち (以下、連携生) が個性を活かすことによって、自分に自信を持ったり、楽しく他者と関わったりすることである。当該生徒たちは、これまでの活動より、自信が低い傾向にあることや、他者理解の困難さ、他者との関わりの不得意さを課題として抱えていることが分かっている。そのような生徒たちがワークショップを通じて、個性の活用からなる成功体験による自信の獲得や、他者と楽しく関わる経験を得られるよう尽力した。また、今年度からは連携生たちに加えて、霧が丘高校のボランティア部の部員である生徒たちも活動に参加している。

上記の企画の目的及び趣旨に沿ったワークショップとして、本年度は大型企画である校内喫茶店を開催した。これは、霧が丘高校の担当の先生から長期間でのイベント計画の提案をいただいたこと、ボランティア部員の参加により以前よりも活動規模が拡大したことを踏まえて考案された。

また、来年度にも、8月上旬にイベントを開催する予定である。

(2) 事前準備

霧が丘高校にて本企画を実施するにあたり、事前に高校の担当の先生と適宜メールで連絡を取り、企画の目標や活動計画、具体的な内容や進行スケジュールの共有と説明を行った。また、参加者募集のためのポスター配布を依頼した。担当の先生からは、企画や大学生への要望を伺い、日程の調整や備品の準備についても対応いただいた。

その他の事前準備として、企画の目標や活動計画の策定、参加者募集のための配布用のポスター作成を行った。加えて、説明用資料やスライド、調理器具等についても事前に入念に準備を行った。

(3) 準備、実施期日

第１回

準備日：5月上旬より

実施日：5月 24日

第２回

準備日：6月上旬より
実施日：7月８日
第３回
準備日：7月下旬より
実施日：7月29日
第４回
準備日：9月下旬より
実施日：10月18日
第５回
準備日：10月下旬より
実施日：12月９日
第６回
準備日：12月下旬より
実施日：3月11日

（4）企画内容

①校内喫茶店準備

第１回目は、昨年度に引き続き、校内喫茶店の開催に向けた準備として、メニュー表や宣伝用の大きな看板、装飾の作成を行った。それぞれ分担して作成し、オリジナリティあふれる素敵な備品と装飾が完成した。

今年度最初の交流会でもあったため、参加者同士の交流を重視し、自己紹介やチームで協力するゲームを実施した。さらに、喫茶店当日の全体目標や来客数の目標（50人）、個人目標（当日に頑張りたいこと）を決定した。

写真１　第１回（2024年５月24日）装飾制作

②校内喫茶店リハーサル

第２回目は、接客、調理の練習及び流れの確認を行った。ロールプレイングを通じて実際の接客の流れを体験できるようにしたほか、調理方法を動画で確認することで、高校生らの不安が解消されるように工夫した。また、目標を改めて確認し、参加する高校生と大学生がそれぞれ目標意識を持って本番に臨めるよう準備を整えた。

③校内喫茶店本番

第３回目は、校内喫茶店の本番を開催した。霧が丘高校の生徒や保護者、先生方に無料でスイーツとドリンクを提供した。来客目標として設定していた50人を上回る66人が来場した。

調理においては、波のある来客状況に合わせて臨機応変かつ迅速にメニューを準備する必要があった。一方、接客では、生徒たちが明るく丁寧に対応しつつ、ミスなくオーダーを取れるよう、私たちはアドバイスやサポートに徹した。予想以上の来客があったため、会場のキャパシティ不足やメニュー提供の遅れなどのトラブルも発生した。しかし、席数を増やしたり、生徒をサポートしたりすることで、柔軟に対応した。

また、当日のうちに生徒たちと振り返りを行い、事前に設定した個人目標が達成できたかどうかを確認し、感想を共有した。これらの経験を今後の生活や活動に活かせるよう、フィードバックを行った。

写真２　第３回（2024年10月18日）喫茶店接客フロアの様子

④オリジナル LINE スタンプ作り

第4回目は、新たにワークショップに参加した生徒と、大学生の新メンバーとの親睦を深めるため、共同で LINE スタンプ作りを行った。

⑤夏の企画決め

第5回目では、8月上旬に開催予定のイベントで行う企画を決定した。このイベントを実施する目的は、連携生が自分のいいところを見つけ、自分を理解し、大学生との交流の中で、他者を理解するといった、自己理解と他者理解にある。その目的を踏まえながら、当日連携生の要望を聞いたところ、イベントの企画は、連携生自身が準備や接客を行い、主体的に楽しみながら来場者と関わることを目標とした、喫茶店形式で来場者にパフェづくりを体験してもらう「パフェスティバル」に決定した。

⑥夏のイベント「パフェスティバル」の準備

第6回目では、先述の「パフェスティバル」に向けて、役割分担、看板のロゴ、イベントを行う上での個人目標を決定した。

3　結果・意義・所見

(1) 活動の結果

本活動の結果として、定期的なワークショップの開催を通じて、生徒たちが他者と楽しく関わり合いながら、自信を持つ機会を創出できたと考える。特に今年度は、大型企画として校内喫茶店を開催したこともあり、毎回参加する連携生やボランティア部員が前年より増加し、多くの生徒が他の生徒や大学生との交流を楽しみに、意欲的に活動へ参加する姿が見られた。回を重ねるごとに親睦が深まり、活動を通じて自然と交流する様子が多く見受けられた。

また、喫茶店の開催中は、先生方や保護者、在校生と直接やりとりする機会が多く、最初は緊張した様子の生徒たちも次第に慣れ、笑顔で自信を持って接客ができるようになっていき、楽しみながら他者と関わる様子が見られた。さらに、来客から直接感謝の言葉が接客を行っている生徒に伝えられる場面も多くあり、生徒たちはやりがいや充実感を感じながら業務に取り組み、自信を持つことに繋がったのではないかと考える。振り返りでは、殆どの生徒が個人目標を達成でき、「楽しかった」、「ぜひまたやりたい」など前向きな声が多く聞かれた。

これらのことから、生徒たちは喫茶店運営における協力や来客との交流を通じて、他者と楽しく関り合いながら、自分に自信を持つ機会となったのではないかと考える。

(2) 活動の意義

本活動の意義は、先述の活動の結果の通り、参加生徒が楽しく他者と関わることや自信を持つ機会になるだけでなく、大学生側にとっても通常の大学生活では身に付けられないような経験や知識を得ることができる点にもあると考える。特に今年度は長期間に渡る大型イベントを開催したため、スケジュール設定や事前準備などにおいて多くの困難があった。それらを試行錯誤の結果、乗り越えることで企画運営のノウハウや知識の獲得、また生徒との関わりを通して、コミュニケーションの方法を実践的に学ぶことができたと考える。

また、連携生一人ひとりがその個性や創造性、良さを活かせるよう企画やその方法を考え、準備するため、多様な背景を持つ人たちとの相互理解や共生を目指した交流の方法についても学ぶことができたと考える。

(3) 今後の活動について

次回のワークショップの開催は、5月と7

月を予定していて、8月上旬のイベント開催に向けて、装飾の作成や、提供するお菓子の試作、準備を引き続き行う所存である。連携生の意見を積極的に取り入れたイベント準備を行うとともに、イベント開催にあたり、霧が丘高校及びその連携生や先生方など多くの人と協力する必要があるため、念入りに計画していきたい。

企画名「日本酒ナイト」
―若者に日本酒の魅力を伝える試飲・体験イベント―

代表者：加藤菜央

1　連携した学外の個人・団体名（複数の場合すべて記載すること）

・小林酒造株式会社
・13LABO

2　実施概要（準備・実施期日・内容・従事者名を含め詳細に記述のこと）

（1）準備・実施期日・内容・従事者名

- 準備期間：4月 18日～ 8月 10日
- 実施日：8月 8日
- 会場：13LABO
- 内容：
  - ○　日本酒 × 市販飲料飲み合わせ体験
  - ○　日本酒 × 駄菓子食べ合わせ体験
  - ○　ラベルデザイン比較
  - ○　日本酒タイトルの影響分析
- 従事者：ゼミ生 14名・教授
- 参加者数：一般参加者 25名、ゼミ生 13名（合計 38名）

（1）具体的な活動内容

【日本酒の魅力を引き出すテストマーケティング】

①日本酒の新しい楽しみ方の提案

本イベントでは、お酒離れが話題となっている若者に対し、日本酒に手を出すきっかけとしてどのようなアプローチを取ったら効果的かをテストマーケティングすることを目的とした。事前の調査として、大学生 59名を対象にアンケートを実施したところ、お酒が好きな人が 76.3%、飲んだことがない人が 31%、飲んだことがある人が 68% という結果が得られた。このデータをもとに、日本酒に対する心理的なハードルを下げるための施策を検討した。具体的には、日本酒と市販の飲料（レモン・ジャスミン茶・炭酸水）や駄菓子（ラムネ・ベビースター・チョコ）との組み合わせを試し、日本酒の味わいの広がりを体験できる場を提供した。これにより、従来の飲み方にとらわれない自由な楽しみ方を提案し、日本酒初心者でも気軽に手に取れるようなアプローチを模索した。実際に試飲を行った参加者からは、「日本酒の印象が変わった」「飲みやすく感じた」といった声が多く寄せられ、日本酒の可能性を広げるきっかけとなった。

②ラベルデザインと購買意欲の関係

日本酒の購買意欲を高める要素の一つとしてラベルデザインに着目し、伝統的なデザインとポップなデザインの 2種類を用意して比較検証を行った。調査の結果、特に 20代の 83% がポップなデザインに対して「親しみやすい」と回答し、興味を持つきっ

かけになったと評価した。一方で、伝統的なデザインは「高級感がある」「贈答用に選びたい」という意見が見られ、ターゲット層に応じたデザイン戦略の重要性が示唆された。この調査結果をもとに、日本酒のブランド価値を高めるためのラベルデザインの方向性について考察を深めた。

③日本酒のネーミングと印象の変化

日本酒の名称が消費者の印象に与える影響についても検証を行った。具体的には、従来の伝統的な名称と、若者向けのユニークなネーミングを比較し、それぞれの印象の違いを調査した。アンケートの結果、ユニークなネーミングの方が「興味を持つきっかけになった」と回答した割合が高く、特に20代・30代の若年層にとって日本酒を選ぶ際の重要な要素となることが分かった。加えて、ネーミングに親しみを感じることで、日本酒に対する心理的なハードルが下がるという傾向も見られた。このことから、日本酒のブランド戦略において名称の持つ影響力を活かすことが、若年層へのアプローチの鍵となると考えられる。

(2)【市場ニーズの分析と企業との連携】

①プロモーション施策の実施

イベントの認知度を高めるために、SNSを活用したプロモーションを実施した。Instagramを中心に、ターゲット層に刺さるデザインの投稿を企画し、視覚的に訴求力のあるコンテンツを作成した。また、イベント参加者が体験をシェアしやすいよう、オリジナルハッシュタグを用意し、SNS上での拡散を促した。その結果、イベント当日の来場者の約40%がSNSを通じてイベントを知ったと回答し、オンライン上での情報発信がリアルな来場につながることを実証した。

図１　「日本酒ナイト」広告ポスター

②参加者との対話を通じた市場ニーズの把握

イベントを通じて、実際に若者が日本酒に対して抱くイメージや、飲みやすいと感じるポイントをヒアリングし、消費者視点でのインサイトを収集した。特に「アルコール度数が高く感じる」「飲み方がわからない」という声が多く、初心者向けの飲み方提案の必要性が再認識された。これらのフィードバックをもとに、今後の日本酒のプロモーションにおいて、より分かりやすい飲み方の提案や、初心者向けの商品開発の可能性について検討を深めることができた。

③小林酒造との議論を通じた課題発見

本プロジェクトを進めるにあたり、クライアントである小林酒造と議論を重ね、日本酒市場における課題を発見することも重要なプロセスであった。特に、若年層への訴求方法や、新しい飲み方の提案に対する

受容性について意見交換を行った。小林酒造からは、「日本酒は伝統を重んじる文化が根付いているため、新しい試みが受け入れられにくい傾向がある」という懸念が示された。一方で、若者向けの新たなブランディングの必要性についても認識を共有できた。さらに、イベントを通じたデータ収集の結果を小林酒造と共有し、今後の製品開発やプロモーションの方向性について具体的な議論を進めることができた。こうした企業との協働を通じて、単なるイベント運営にとどまらず、日本酒業界全体の課題解決に向けた示唆を得ることができた。

本イベントを通じて、日本酒に対する若者の関心を引き出し、新たな楽しみ方を提案することで、日本酒市場の活性化に貢献する手がかりを得ることができた。

3　結果・意義・所見（活動の成果を分析しその社会的意義がわかるように記載してください）

(1) 活動の成果

アンケート結果（38名対象）より、日本酒に対する興味が向上したと回答した参加者は68.4%（26名）であった。特に、レモン×日本酒（試飲者の74%が「飲みやすい」と回答）やジャスミン茶×日本酒（61%が「香りが良い」と評価）が好評であり、日本酒の楽しみ方の多様性が受容されやすいことが示唆された。また、ポップなラベルデザインは高級感のあるデザインよりも参加者の選好率が高く、特に20代の83%が「親しみやすい」と評価した。

また、日本酒を普段飲まない参加者のうち、イベント後に「日本酒を今後購入したい」と回答した割合は52.6%（10名）であり、日本酒の新しい楽しみ方を提案することで消費者の意識が変化する可能性が示された。さらに、印象に残ったブースに関する質問では、「ラベル比較」が最も多く、全体の31.6%（12名）が「視覚的要素が購買行動に影響を与える」と認識していることが明らかになった。

(2) 社会的意義

本企画は、日本酒業界が若年層にアプローチする上での有効な手段を示した。特に、日本酒を全く飲んだことがなかった参加者（8名）のうち75%（6名）が「今後日本酒を購入したい」と回答した点は、若者市場の開拓可能性を示唆する。従来の「敷居が高い」「年配の人向け」というイメージを払拭し、新たな消費者層を獲得するためのマーケティング戦略の一助となることが期待される。

さらに、本イベントのデータをもとに、ラベルデザインやネーミングの工夫が購買

図1　当日イベントの様子

意欲を高めることが示唆された。日本酒業界全体の活性化に向けて、こうした消費者の意識変化を踏まえた商品開発が求められる。

（3）今後の展望

今後は、本イベントの知見を活かし、さらに多様な飲料（フルーツジュース、紅茶など）や食品との組み合わせを検証し、日本酒の楽しみ方を拡充させる。また、アンケート結果をもとに、酒造メーカーと協力し、若年層向けの商品開発やプロモーション施策を具体化することで、日本酒文化の新たな価値創出を目指す。加えて、消費者の購買行動データを蓄積し、より科学的なアプローチで日本酒のマーケティングを強化することも重要である。

映画「夢みる小学校 完結編」自主上映会

代表者：前田すみれ

1　連携した学外の個人・団体名

【上映作品提供】
・まほろばスタジオ
（映画制作・配信スタジオ）

【講評】
・杉並区立方南小学校校長 吉岡光弘先生
・杉並区立方南小学校支援本部長　大嶋正人様

2　実施概要

（1）企画概要

本企画は、映画や感想共有を通して自身の学校経験を相対化し、学校のあり方や身近な教育環境について関心を持つきっかけを創出することを目的として、映画「夢みる小学校　完結編」の自主上映会を行うものである。上映会当日は、映画の鑑賞に加え、参加者間で感想を共有するとともに、ゲストから講評をいただく機会も設定した。

「夢みる小学校」は、体験学習を主とするきのくに子どもの村学園の密着取材を中心に、学校教育のあり方を問う2022年公開のドキュメンタリー映画である。本企画では、取材当時の小学生が成長した姿を追加した「夢みる小学校　完結編」（2024年公開）を上映した。

本企画の考案・準備・広報・進行は、企画代表者の前田すみれを中心に、仲田ゼミナールの学生が主体となり行った。

（2）活動内容

①考案

本企画は、多様な背景を持つ人々と教育について語り合う場を創出したいという思いから始まった。現在、学校教育では問題・課題が山積し、様々な議論・取り組みが為されている。教育を提供する者のみならず、教育を享受する者や、「教育する - される」の関係を越えた様々な背景・経験を持つ人々がこれらの議論に参画することで、多様な意見・視点が付加されると考えられる。そのため、学校内外の人々が集い議論できる機会の創出を行うことにした。加えて、これまでゼミにおいて4回に渡りワークショップを開催した中で、教育に対する考えや価値観は自身の経験に大きく左右されることが明らかになった。「夢みる小学校完結編」には、鑑賞者の学校経験や教育観念と紐づけ、賛否両論様々な考えを生み出す力があり、教育問題や学校のあり方について多様な意見や議論の創出が期待できると考え、この映画を選定した。

多様な参加者との映画鑑賞を通して、より現実に即した具体的な議論を促進できるよう、映画を「観たまま」にせず、感想を共有したり学校現場に携わる者からの話を伺ったりする時間を設ける構成を考案した。

②準備

企画当日に向け、代表者を中心に5月から準備を行った。毎週のゼミで進捗状況を共有し士気を高めるとともに、広報活動は各ゼミ生が役割を持ち、ゼミ全体で多くの

参加者を集めることに奔走した。

a）協力先への依頼

前節で述べた理由により、上映作品として「夢みる小学校」を選定し、本映画の制作・配給スタジオであるまほろばスタジオに自主上映の申込を行った。偶然にも、「完結編」については本企画実施日が配給開始日であったため、日本初の自主上映会場となった。

また、映画上映・感想共有後の講評を行うゲストとして、杉並区立方南小学校長・吉岡光弘先生と同学校支援本部長・大嶋正人様を招聘した。杉並区立方南小学校は、2010年に学校支援本部を設立し、「すべては子どもたちの笑顔のために」をスローガンに長年学校の地域連携を積極的に行っている学校である。公立学校関係者を招くことで、映画の内容と身の回りの教育環境を結びつけることが可能になると考え、お二方に打診し、お引き受けいただいた。

【図1】 配布・掲示用チラシ

b）広報

本企画の目的を果たせるよう、【図1】のチラシを中心に幅広く広報活動を実施した。学内関係者に向けては、映画の内容に関連する講義内での紹介やチラシの学内掲示・配架、ゼミのInstagramでの投稿を行った。学外者に向けては、ゼミ生からのチラシ配布や、イベント紹介サイトである「ちよだコミュニティラボ」「学びの場.com」への掲載を行った。

③企画実施

本企画は、2024年7月1日(月)に実施した。場所は法政大学市ヶ谷キャンパス大内山校舎Y606教室である。当日のスケジュールは以下の通りである。

1. 本企画の趣旨説明
2. 映画「夢みる小学校完結編」上映
3. 感想共有
   参加者とゼミ生で構成するグループで感想や考えを共有
4. 講評・総括
   杉並区立方南小学校長・吉岡光弘先生と同学校支援本部長・大嶋正人様から、映画の感想や映画に関連した学校での実践についてお話しいただく
5. 企画代表者より挨拶
6. アンケート記入

企画当日は、ゼミ生全員が役割を持ち、スムーズな進行や参加者への対応に従事した。「3.感想共有」では、参加者5人程度のグループに適宜ゼミ生が加わり、映画の感想や映画から考えたことについて自由に語り合った。後節で述べる通り、当日は小学生から大人まで様々な年代の方が集まり、

どのグループも盛り上がりを見せていた。「4. 講評・総括」の前には、ゲストの方々の紹介に加え、映画との接点を述べることによって、参加者がつながりを理解できるよう工夫した。

企画終了時は、参加者にアンケートを記入していただくことによって、広報活動の効果検証や企画全体の反応についての振り返りができるようにした。

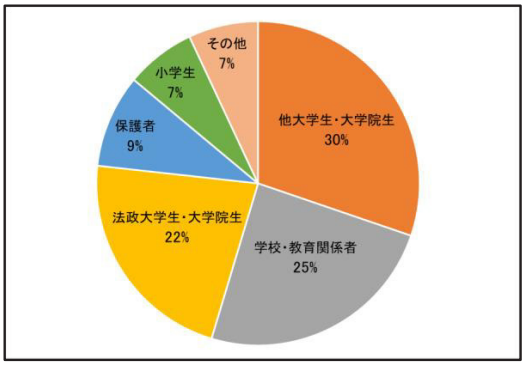
④振り返り

企画終了後、ゼミ生で感想を共有した。また、翌週のゼミにおいて、参加者の内訳やアンケート結果を基に反省を行った。良かった点だけでなく改善点が複数出たことで、今後の企画に活かせる振り返りを実施できた。加えて、ゼミの Instagram で本企画の実施報告をし、活動の成果を広く社会に共有した。

3　結果・意義・所見

(1) 結果

本企画の参加者は、ゼミ生・先生を合わせて計 101 名であった（ゼミ生集計）。参加者の大まかな構成は【図 3】の通りである（申し込みベース）。なお、当日の不参加に加え、飛び入り参加も可能であったため、実際の内訳とは若干異なる。



【図 3】申込者の属性

他大学・大学院生や教育学の研究者、学校の地域連携に携わる方々や市民など、学外者の参加が多かったことは、広報活動の成果を物語っている。特に、6名もの小学生が参加してくれたことは嬉しいことであった。

学内からは、大学生・大学院生に加え本学部の先生方、事務職員の方々にご参加いただいた。教育や学校のあり方について、ゼミや授業を越えて語り合う機会を生み出すことができた。

アンケートは 40 名にご回答いただき、回収率は約 45% である。次項では、アンケート結果とゼミ生の振り返りを基に、良かった点と課題点を述べる。

(2) 所見

良かった点は 2 点ある。

第 1 に、円滑な運営である。これは、ゼミ生自身・参加者の両者から挙げられた。十分な事前準備に加え、ゼミ生一人ひとりが、本企画に対して当事者意識と責任感と持っていたからこそ、協力した運営を行うことができたと考える。一方で、「ゼミ主催のイベント」という印象が薄れ、ゼミ生ではなく本企画のスタッフとしての立ち回りが多かった点は課題である。

第 2 に、前述の通り様々な属性の人にご参加いただいた点である。後述のアンケートからも明らかな通り、多くの参加者に教育について考える機会を提供することができたと考えられる。一方で、本学学生の参加が少なかったことや、休憩までの時間が長く子どもの集中力が持たなかったことなど、宣伝方法や日時の設定に課題が残った。

(3) 意義

本企画実施の意義について、ゼミ内の企画として実施した意義と、参加者を含め社会に与えた意義に分けて述べる。

①ゼミ的意義

本企画の実施は、ゼミ生にとっても有意義であった。ゼミ生が主体となって企画・運営をすることによって、個々人がゼミにおいて役割と責任を持っていると自覚するとともに、学外者を多く招いたことによってゼミが与える影響の大きさと教育に関心を持つ人々とのつながりを持つことができた。本企画を契機につながった人々・組織とは、今後もフィールドワークなどで接点を持ち続けたい。

加えて、参加者と同様に、映画を通して自らの学校経験を相対化し、様々な価値観や考えに触れながら教育のあり方について改めて考える機会は、各ゼミ生の興味関心の広がりや今後の研究に活かされると考えられる。

②社会的意義

本企画の社会的意義は２点ある。

第１に、属性・年齢の異なる多様な人々が教育について考えるきっかけを創出することである。アンケートからは、以下のような感想が寄せられた。

「自分が夢みる小学校に通っていたらどうなっていたかな。とか考えていました。（中略）いろんな学校の選択肢があっていい。公立学校も自由な発想と理念を持つことができると思いました。」

「子どもの今後を考え鑑賞していましたが、図らずもわたし自身が救われてしまいました。（中略）子どもの未来にも、親としても、1人のわたしとしても、大きな希望の光が灯った映画であり、企画でした。」（特定を避けるため、一部改変）

このように、映画から派生して自身や家族の学校経験を振り返った感想・考えが多く寄せられた。

第２に、参加者が身近な教育環境について考え直す機会を創出することである。確かに、映画に登場する学校の教育のあり方は、国内では非常に珍しい事例である。しかし、「映画に出てくる学校は特別」「あの学校・あの校長だから出来たこと」という印象で終わらせず、映画で登場する学校に共通する思いや根本にある考え方を、身近な教育環境に落とし込めるよう、公立小学校の現場に携わる方々からの講評を取り入れた。アンケートからは、「実際の公立小学校での取り組みを聞くことができてとても勉強になった」「公立校の紹介に勇気をもらえた」などの感想が寄せられた。

本企画終了後も、参加者１人ひとりが自身の学校経験を相対化することや映画で学んだことを身近な教育環境に活かすことが効果として期待される。

メディアを用いたSDGs推進活動
―異文化交流と学習支援におけるメディアリテラシー―

代表者：松崎真由

1　連携した学外の個人・団体名（複数の場合すべて記載すること）

泰日工業大学
栃木県立真岡北稜高校
いわきユネスコ協会
いわき湯本温泉古滝屋
墨田区えんぴつの会

2　実施概要（準備・実施期日・内容・従事者名を含め詳細に記述のこと）

本報告書では、法政大学坂本ゼミの学生活動サポート助成を通して行った活動の実績について報告する。今年度は、バンコク研修、世界報道の自由デーティーチイン、福島研修、そして墨田区自主夜間中学校「えんぴつの会」の学習支援活動の4つのプロジェクトに取り組んだ。以下、各活動について詳細に紹介する。

(1) コンテンツ制作を通した異文化交流と学習支援

①バンコク研修

今年度のバンコク研修は8月23日から27日までの間で開催し、泰日工業大学との異文化交流を目的として実施した。現地での学生同士の交流を通じて、言語や文化の違いを理解し、国際感覚を養うことを目指した。研修では、バンコクの豊かな文化や歴史に触れるため、様々な観光地を訪れた。

まず、バンコクを象徴するアユタヤ遺跡、ワットパクナムを始めとする様々な観光地を訪れ、仏教の精神や体の伝統文化に触れた。お寺の荘厳な建築や独特の雰囲気に圧倒されるだけでなく、研修を通じて日本にはない食文化や気候を実際に肌で感じることができた。この体験を通じて、異文化の奥深さを知り、他国との違いをより深く理解することができた。

さらに、現地の大学生と共に動画作成にも取り組んだ。今年度はSDGsをテーマに研修や交流を通じて得た知見や思いを動画にまとめ、新たな表現を模索する良い機会となった。

彼らとの交流を通じて、日本とタイの気候や食文化などSDGsに関する意見や認識の違いを理解し、国際社会でのコミュニケーション能力を向上させ、異文化理解を深めることができた。言語や文化の壁を超えた共同作業の経験は、参加者たちのとって貴重な学びの場となった。

②福島研修

9月30日から10月1日と11月4日から11月5日での福島県での活動では被災地訪問と学習支援を行った。原子力災害考証館や請戸小学校、浪江駅周辺を訪れ、今も残る被害の状況や復興に向けた新たな取り組みなどを肌で感じ、学ぶことができた。加えて、今回は2年生主体であったため初めて被災地を訪れる学生も多く、衝撃を受けるような学びがあった。

また、小学生の動画による海外交流の支援も行った。東日本大地震で被害を受けた四倉とスマトラ島沖地震で被害を受けたイ

ンドネシアのアチェの小学生がお互いを紹介する動画を作り合うことで異文化交流をする活動を動画編集などの面からサポートした。小学生にとっては慣れない言語での挨拶など難しい点もあったが、小学生らしいエネルギーでお互い楽しんで動画制作することができた。

（2）メディアリテラシー教育

①栃木県立真岡北稜高校のESD支援

今年度から私たちはESD(SDGsを実現するための教育）支援活動を実施した。支援先である栃木県立真岡北稜高校の生徒たちを主体とする地域活性化プロジェクトをサポートしながら、メディアを通した発信も行うことで、取り組みを多方面の方々に知ってもらい、真岡北稜高校をユネスコスクール加盟へとつなげることを目標としてきた。以下では、主な活動状況を記す。

■7月19日

この日は、現地の学生を含むプロジェクトチームが真岡市役所を訪問し、職員と直接話し合いを行った。これにより、街全体の課題を把握することができた。主な課題は、人口減少と少子高齢化である。これらの影響により、経済が縮小し、行政サービスの低下が懸念されている。その結果、街の魅力も低下し、若者が外に流出するという負のサイクルが生じている。さらに、現状では街に移住してきている人々の特徴として、一世帯家族や外国人労働者が多い傾向が見られる。これらの課題を解決し、より魅力的な街づくりを進めるために、以下のような活動が取り組まれている。

・「いちご王国栃木の首都　もおか」というキャッチコピーの作成（日本トップレベルの苺生産量をアピール）
・複合交流拠点施設「monaca」の今年度オープン
・起業支援サービス「まちつく」の活性化
・人気夏祭り（花火大会、灯篭流し）のPR活動

これらの活動は、市として進める予定であるが、現実的な問題解決には、地域に暮らす一人ひとりの意識を向上させることが最も重要であるとされている。そして、生徒たちからは以下の疑問点が挙げられた。

・キャッチコピーや複合交流拠点施設の影響力について→　実際、地元の生徒たちですら認知していないほどの影響力に限界があるのではないか。
・夏祭りのPR活動について→　すでに人気のあるイベントではあるが、他の新たなイベントの実施も重要ではないか。

■8月8日

前回の活動を踏まえ、この日は生徒たちとともに具体的な活動内容に向けたアイデア出しを実施した。各グループは6人ずつに分かれ、それぞれの解決策を考えた。

私のグループでは、外国人労働者に焦点を当てた。彼らの移住が増えていること自体は街を活気づけるポジティブな要素として受け止められているが、ポイ捨ての増加や深夜に集まる様子など、マナー面で不安を感じている市民も少なくないことがわかった。また、実際に会話をする機会があったとしても、日本語を十分に理解していない外国人も多い現状がある。

そのため、外国人が地域に適応できる環境づくりと、私たちが彼らを受け入れる環境づくりが必要であると考えた。そこで、コミュニケーションを通じてお互いを理解することを目標とした。そして議論の結果、私たちのグループは「夜間中学校」の実施を解決策として提案した。この取り組みによって、外国人が日本語を習得し、習得した日本語を活かして地域住民との交流を深めることができるコミュニティイベントを

開催することを計画した（多文化共生も視野に入れている）。

また、最終的には真岡市の魅力を知ってもらい、外国人の移住者や観光客をさらに増やすことを目指す。今後の流れとしては、各グループが提案した解決策の中から実際に取り組む内容を選定し、市役所に実施内容を報告する予定である。その後、実施に向けた準備を進め、学内外での発表を行う予定である。

②墨田区自主夜間中学校「えんぴつの会」訪問

この活動では墨田区自主夜間中学校「えんぴつの会」に訪問し、ドキュメンタリーを制作した。映像の構成から取材、撮影、編集までを全て自分たちで行った。今年度はえんぴつの会のスタッフさんの視点から自主夜間中学への理解を深めるということをテーマにドキュメンタリー制作を行った。撮影の中で出演者（今回はスタッフさん）の方から自然な言葉や普段感じていることを引き出すには、私たち映像の制作者と出演者が関係を築くことが必要不可欠である。突然お邪魔して急に大きいカメラを向けてインタビューするのでは、やはり出演者側もどうしても緊張してしまい、うまく言葉が引き出せないものである。そこで私たちはこの1年かけて授業の合間を縫って何度もえんぴつの会のに足を運び、たくさんコミュニケーションを取った。さらに夜間中学について学ぶために夜間中学に関する勉強会や夜間中学出身者によるスピーチ大会にも積極的に参加した。こうして学習者さんやスタッフさんたちとコミュニケーションを取ったり、夜間中学に関するイベントに参加したりする中で夜間中学の姿を捉え、ドキュメンタリー制作を行った。

3　結果・意義・所見（活動の成果を分析しその社会的意義がわかるように記載してください）

ゼミ活動全体を通じて、異文化理解、地域貢献、メディアを活用した情報発信など、非常に多角的な学びを得ることができた。特に印象深かったのは、バンコク研修で現地の学生と直接交流し、食文化や気候の違いを体験できたことだ。これによって、異文化に対する抵抗感がなくなり、逆にその多様性を積極的に受け入れることができるようになった。また、福島研修を通じて、復興に向けた地道な努力を目の当たりにし、自分たちの役割をどのように果たしていくべきかを考えるきっかけとなった。さらに、栃木県でのESD活動では、地域活性化に自分たちが実際に貢献できることに非常に大きな意義を感じた。特に、人口減少や少子高齢化といった課題に対して、地域の魅力をどう外部に発信するかを高校生や市の方々と共に考えられることは大変貴重な体験だった。この課題解決向けて、今回は「夜間中学校」の実施という案を出して話を進めているが、これは多文化共生の視点からも意義が大きいと感じた。また、このように地域の明確な課題がある中でも、授業の一環として「とりあえず何かをすれば良い」という訳ではなく、実行した先のビジョン・影響力なども考えた上で進めなければいけないことも深く理解できた。

そして、本ゼミ活動の社会的意義としては、異文化理解や地域支援を通じて、持続可能な社会づくりの一端を担う力を養うことにある。SDGsの達成には、異なる文化や地域の課題に対して理解を深め、積極的に行動することが求められている。このゼミ活動を通じて得た経験や知識は、社会的責任を果たすための土台となり、今後の社会活動においても大きな意義を持つと確信し

ている。また、メディアを用いた情報発信活動は、社会の中での問題提起や意識改革を促すための強力な手段であることを実感した。映像や文章で問題を伝えることは、単に情報を提供するだけでなく、人々の心に響き、行動を促す力を持っている。これらの活動を通じて、社会に対する貢献の仕方や、自分たちの学びをどのように社会に還元できるかを深く考える機会を得ることができた。

総じて、このゼミ活動はゼミ生の視野を広げることに大きく寄与し、大きな社会テーマも自分事として捉える柔軟な考え方、意識を身に付けるとともに、社会的責任を果たすための意識とスキルを養う貴重な経験となった。

ボスニア・ヘルツェゴビナにおける文化広報活動
―短歌を通じて学ぶ日本文化―

代表者：園田恭佳

1　連携した学外の個人・団体名

・サラエボ大学公開日本語講座
　宮野谷希 先生
・河路由佳 先生
　（杏林大学外国語学部特任教授）

2　実施概要

(1) 企画背景

当企画のきっかけは、私が所属するゼミの担当教員である熊谷先生から、ボスニア・ヘルツェゴビナに関する研究について話を伺ったことにある。ボスニア・ヘルツェゴビナでは、わずか30年ほど前に民族や宗教の違いから紛争が勃発し、隣人同士で争いを繰り広げたという。このような複雑な歴史を持つ国に、強く興味を抱くようになった。

そんな中、同じゼミのゼミ生が2022年度に現地を訪問し、日本語講座に参加していたことを知った。ボスニア・ヘルツェゴビナでは、日本のマンガやアニメの影響を受けて、日本文化への関心が高まっている。特に若者の間で日本語学習の需要が増加しているという。その一方、日本人講師も不足や予算の制約により、多くの日本語クラスが休校に追い込まれている現状があるのだ。

このような状況の中、年の近い日本人大学生が日本語学習をサポートすることで、現地の学習者により日本への親しみを深めてもらうことができるのではないかと考え、企画の立ち上げに至った。

(2) 活動内容

①準備

10月頃から、日本語講座を担当する宮野谷先生と連絡を取り始めた。当初は1月下旬から2月上旬に訪問し、前回訪れたゼミ生と同様に日本語講座への参加を予定していた。しかし、3月上旬に宮野谷先生の知人である河路先生が訪問し、短歌の講演とワークショップを開催することを知ったため、そちらにボランティアとして参加することを決めた。

②活動日

3月6日、7日

③本番

画像1　クラスの風景

講演およびワークショップでは、講師の河路先生が短歌について実際の歌を用いて

解説を行い、ワークショップでは最後に参加者が短歌を作成し、互いに披露するという流れで進行された。私は進行や、短歌作成における参加者のサポートを行った。

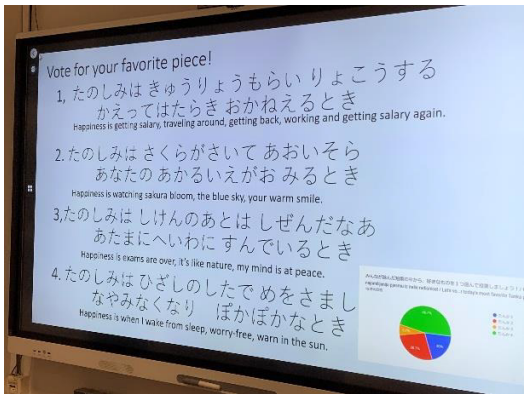
短歌の解説では、日本最古の歌集とされる『万葉集』から現代の歌まで、その歴史や印象的な歌を穴埋めクイズなどを通して紹介された。例えば、「ことしまた　さくらはさくに　ふたつなき　いのちくるおしく　しなしめにけり」という短歌において、空欄に「つばき・さくら・すみれ・こぶし・つつじ・ぼたん」のどれが当てはまるかという問題が出された。当てはまるのは「さくら」だというが、この歌を通じ、日本人がさくら、特に散り際に美しさを見出しており、かつてはそれが戦場で散る兵士にも当てはめられていたことが説明された。

最後に参加者による短歌の作成が行われた。今回の作成テーマは、橘曙覧の『独楽吟』になぞらえ、「たのしみは ○○○○○○○　○○○○○　○○○○○○○　○○○○○ とき」という形に当てはめるものであった。このテーマに沿って、参加者の意見を聞きながら文字数に収めるよう言い換えたり、接続語を違和感のないように調整するなどの役割を担った。

画像２　短歌作成の様子

作成はグループに分かれて行ったが、私が特にサポートを行ったのが４番（画像３）の短歌である。まず、一番重要な「楽しみ」について尋ねたところ、「昼寝をすること。その間だけは何も考えずにすむため、とてもすっきりした気分になれる」といった意味の返答があった。この気持ちを57577の形式に合うように、「昼寝」を「日差しの下で目を覚まし」と言い換えたり、その時の心地よい気分を「ぽかぽか」という擬態語で表現するなどの工夫を凝らした。実際に完成した短歌は以下の通りである。

「たのしみは　ひざしのしたで　めをさまし
　なやみなくなり　ぽかぽかなとき」



画像３　完成した短歌

その後、完成した短歌を匿名で披露し、参加者全員で好きだと思うものに投票を行った。その結果、４番の短歌で最も高い得票率を得ることができた。参加者からは、「ぽかぽかという表現が良い」といった感想が多く聞かれた。

３　結果・意義・所見

（1）結果

講演、ワークショップには約20人が参加。穴埋めクイズや短歌の作成ではそれぞれ自身の知識に基づいて考えを述べ合い、積極

的に参加している様子が見られた。

(2) 意義

今回の活動の意義として最も大きいのは、ボスニア・ヘルツェゴビナの人々への日本語教育に貢献できた点である。前述のように、ボスニア・ヘルツェゴビナでは若者の間で日本文化への関心が高まっており、日本語を学びたいという需要が増えている。このような状況において、単に言葉を教えるだけでなく、日本の伝統文化や芸術を通じて学ぶことによって、より深い理解と興味を引き出すことができたのではないだろうか。

短歌は単なる言葉の読み取りだけでなく、深い解釈を必要とする。言葉の裏に潜む感情や風景などを理解することで、参加者は日本的なものの見方や考え方に触れることができたのではないだろうか。参加者も穴埋めクイズや作成に積極的に参加をしており、自身の持つ日本への知識を最大限活用しながら、日本文化を理解しようと試みていた。今回の活動では、日本語学習の枠を超え、奥深い日本文化への関心を深めることができ、参加者にとって非常に意義あるものであったといえる。

(3) 反省・課題

①参加者との交流

まず反省点として挙げられるのは、あまり多くの参加者と交流ができなかった点である。日本語講座には、長く日本語を学んでいる人からまだ学び始めたばかりの人まで、さまざまなレベルの学習者がいる。私が直接交流したのは主に短歌作成の場であり、日本語が堪能な参加者との関わりが中心となってしまった。そのため、あまり日本語が得意でない参加者とのコミュニケーションが不足してしまった。日本語を学ぶ場である以上、レベルに関係なく全ての学習者に対して積極的にコミュニケーションを取るべきだろう。また、自分の英語能力の低さも問題であったと反省している。

②適切なサポート

今回私は短歌の作成をサポートしたが、どの程度まですべきなのかという疑問が生じた。接続語の不備など、文法的におかしな部分を調整するのは役割であると感じていたが、参加者が思いつかなかった単語を提案したり、短歌的な言い回しを考えることについては、どこまで介入すべきかと迷いがあった。

例えば、特にサポートを行った「たのしみは　ひざしのしたで　めをさまし　なやみなくなり　ぽかぽかなとき」という短歌。当初、参加者は「昼寝」という単語をそのまま使おうとしていたが、私は「日差しの下で目を覚まし」という言い回しを提案した。昼寝と直接言及するよりも詩的だと感じたからだ。しかし、この表現は参加者だけでは思いつかなかったものだろう。重要なのは、この場が日本語学習者を対象とした場であるということだ。もう少し参加者の意見を尊重し、彼ら自身の独自性を求めるべきだったのではないか。

私は日本語の母国語話者として「より良い表現」を提供したいという気持ちが強かったが、このような場においては、彼らに合わせた適切なサポートを行うことが大切であると感じた。

4　まとめ・今後について

今回のボスニア・ヘルツェゴビナでの講演やワークショップでは、日本独自の文化である短歌をを通じ、日本語表現の美しさや文化の奥深さ、美意識を伝えることができた。参加者の日本語能力には差があったものの、皆が意欲的に学んでおり、中には

日本人と変わらないほど流暢に日本語を操る人もいて、大変驚かされた。日本から遠く離れた東欧の国で、これほど熱心に日本語を学ぶ人々がいることを知り、日本人として大きな喜びを感じた。

一方で、日本ではボスニアに関心を寄せる人が少ないのが現実である。実際ボスニアに暮らす日本人はわずか36人（2024年10月時点、外務省「海外在留邦人数調査統計」より）であり、世界の他の国々と比較してもかなり少数である。ボスニアと聞くと、紛争やサラエボ事件を思い浮かべる人が多いかもしれないが、実際はエキゾチックな街並みや豊かな自然が残る、とても魅力的な国である。

今後は日本でもボスニア・ヘルツェゴビナについて発信し、互いの交流を深めるきっかけを生み出していきたい。また、機会があれば再び日本語講座に参加し、ポップカルチャーや食文化など、より身近な面からも取り組んでみたい。

富山県の私立高校におけるキャリアサポートプログラム
―大学での研究意欲を高めるためのプログラム―

代表者：辻田夏音

1　連携した学外の個人・団体名

学校法人　荒井学園　高岡向陵高等学校

2　実施概要

(1) 企画実施の背景

富山県の私立高岡向陵高等学校（以下、向陵高校）は、以前からゼミの先輩方との交流があり、紹介を受けた高校である。今後の自分たちのキャリアを形成していくことや、他者のキャリア支援を行っていくうえで、富山という東京近郊とは全く別の環境で暮らす高校生たちとの間に関係をつくり、地方でのキャリア形成について理解を深めることは貴重な経験だと考え、そのこと以上に、自分たちが富山の高校生たちの視野を広げ、進路選択の手助けをしたいと考えたため、本プロジェクトを行うことを決めた。向陵高校の先生方からも交流を行ってもよいという許可を頂いたため、以前より交流を続けてきた先輩方から助言を頂きつつ、高校生に対するキャリアサポートプログラムを企画・実施することになった。

先述したように、向陵高校とは昨年度もオンラインを含め複数回の交流会を実施している。現在、富山の高校生たちは授業の一環としてアントプレナー企画や「男女平等の社会参画」についての課題の探求を行っている。その活動の発展として、今後の大学での研究意欲を高めるために、自分の好きなことに関する探求を行うことが計画されており、その研究への理解度を深めることに繋がる学習が必要であると考えた。また、本プロジェクトには、地方と都市部の教育格差を埋めるという社会的意義もある。都市部では大学進学に関する情報が豊富であり、学校外でも塾や予備校、キャリア講座などを通じてさまざまな選択肢を知る機会が多い。一方で、地方の高校では大学進学に関する具体的な情報が限られ、進学後の生活や研究活動についてリアルなイメージを持つことが難しいという課題がある。また、都市部の学生は身近に大学生や研究者と交流する機会があるのに対し、地方の高校生はそのような環境に恵まれにくく、大学進学後の姿を具体的に想像しにくい。また、事前の先生方と話し合いをする中でも、大学進学後のイメージが湧かず今後に不安があるということをお聞きした。

このような状況を踏まえ、私たちは向陵高校の生徒たちに対して、大学生活や研究活動についての具体的なイメージを持ってもらうことを目的に、本プロジェクトを実施することとした。高校生が大学生と直接対話し、受験体験や大学での学びについてリアルな話を聞くことで、進路選択の幅を広げるとともに、自らの可能性に気づくきっかけを提供することができると考えた。また、今後行う研究活動の導入として自己分析ワークを使って自分の強みや価値観を知るためのプロジェクトを企画した。

(2) 事前準備

私たちは富山県の高校生との交流が距離の関係で回数の限られたものになることを

見据えたうえで、オンラインも含め計３回の交流の一回一回をよりよい機会にする必要があると考えた。

本プロジェクトのメインである高校生との交流の時間をより多く確保するために、向陵高校の先生方との情報交換を積極的に行うことや、事前資料の作成や事前リハーサルを徹底的に行うことで当日の活動の最適化を図った。

（3）実施期日

2024年11月15日（金）
　　オンラインで交流会
2025年２月９日（日）
　　オンラインで打ち合わせ
2025年３月13日（木）
　　対面

（4）企画従事者

中澤颯人、高橋陽香、河村祐太朗、柳原里音、小松崎万絢、長谷川侑香、辻田夏音
計７名

（5）企画内容

1　企画概要

今回のプロジェクトでは高校１年生７名の女子生徒と交流した。今後の実践的な探究活動のサポートを円滑に進行するために、相互理解を深めることを目的とした企画を行った。今回の交流は、都内の大学生と地方の高校生との意見交換やコミュニケーションを主眼に置いており、そのうえで大学生の経験や活動に触れて、各自の進路の視野を広げることが求められるため、トークセッション形式を用いて対話を重要視した活動を行った。

2　大学生の受験体験記・大学生活について

事前の打ち合わせの中で、高校生が受験や大学生活についての不安を抱えていることを伺った。これから交流を行うにあたり、大学生のことを知ってもらう意味も含めて、体験談をプレゼンした。まず初めに高校生たちが意見を言いやすい雰囲気作りのために、活動前にアイスブレイクを行った。その後、事前に準備したスライドを用いてトークセッション形式で行った。体験談を語るだけの高校生が受け身になる形式ではなく、高校生に質問を投げかけたり、グループで大学生活について話す機会をもうけたりなど、高校生が授業に主体的に取り組める形式を用いた。また、体験談を語る中で、あくまで語る内容は一例で、様々な選択があり本人の希望に沿ったものが望ましいということを伝えることを意識した。また、活動後にはアンケートを取り、項目の中にワークに対する印象や効果を問う質問を入れることで、次回以降の交流方法に生かす取り組みとした。

課題としては、事前に生徒へどのようなことが不安や興味があったのかなどの事前情報が少なかったことにより、先生や生徒の意に沿えたのか不確実であったため、今後は事前にアンケートを用いて希望を把握しようと考えた。

3　自己分析ワーク

今後、大学での研究意欲を高めることを目的として、高校生たちは自分の好きなことをテーマに探究活動を行う計画である。その活動の導入として今回のプログラムでは、大学生を交え７人程度のグループを組み、ライフチャートを使った自己分析ワークを行った。自己分析は、大学での探究活動や今後の将来の就職活動を行う際にも非常に重要なことであると私たちは考えている。

自己分析を行なった意義は大きく2つある。

１つ目は視野を広げてもらい、将来を考えてもらうきっかけになる点である。高校１年生の段階で自分の強みを発見してもらう

ことにより、自分と社会を結びつける視点を得ることができると考えた。

2つ目は、今後の探究活動やその他の活動において自信や主体性の向上につながる点である。自己分析ワークの中でポジティブな気づきを得ることで、自己肯定感や自信が高まると考える。また、今後の行動や選択に対して主体的に取り組めるようになると考える。

実際に行なったワークの流れは、①自己分析ワークとは、自己分析ワークを行う意義の説明、②実際にライフチャートを描く、③大学生も含めたグループ内で共有である。②に関して、高校1年生の生徒の個人ワークであり、1人で描き進めることは困難であると想定していたため、各グループの大学生が作業の補助を行なった。③のグループ内での共有に関して、最も印象的な出来事を自分の言葉で言語化して周りの人に説明する作業を行なった。その過程の中で私たち大学生は、強みの発見やどのように困難な状況を乗り越えたかに関しての言語化の手助けを行なった。

今回の自己分析ワークでは、アンケートの結果から私たちが想定していた意義を達成することができたと考えている。今後は、今回発見することができた高校生の自分自信の強みや一面をベースとして私たちが引き続きサポートしながら探究活動を共に行なっていく計画である。

3　結果・意義・所見

(1) 活動の結果と社会的意義

本活動の意義は、富山県の高校生に対して、大学生になってからの研究意欲を高めてもらうことである。また、都内の大学生の私たちが富山県の高校生達と交流することによって、高校生の視野を広げることである。以下では、本企画を実施した結果と社会的意義、今後の活動に向けての振り返りについて詳しく述べていく。

(2) 交流で生まれた変化

私たちは今回の対面交流で初めて高校生と交流をした。高校生らは最初は緊張していた様子であった。特におとなしい性格を持つという生徒もいたが、アイスブレイクや会話を経て徐々に打ち解けることができた。担任の樫田先生からも、生徒たちの様子が徐々に大学生側と打ち解けることができたという言葉をいただいた。

また、一年前に他大学の方のプロジェクトにおいて高校生が自己分析ワークを行い、自分の強みを見つける活動を行っていた。そして一年後に私たちと自己分析ワークを再度行った結果、成長が見られたという。再度行ったことから以前より自己分析をスムーズにすることができた。そして今回の自己分析ワークにおいて私たちは自己分析内の感情の変化について、なぜそのようになったのかを分析することが出来たため高校生にとってより自分の強みを理解することにつながったと考える。

(3) 今後の活動について

今後も、オンライン形式を交えながら2～3か月に一度ほどのペースで継続的に交流を行っていく予定である。オンライン上で樫田先生と話し合いを行い、生徒たちのニーズに応じた交流を行うことを意識し、向陵高校の生徒のみならず、大学生の視野も広がるようなワークを企画し、今後の活動として展開していく。